

40473

教科書文庫

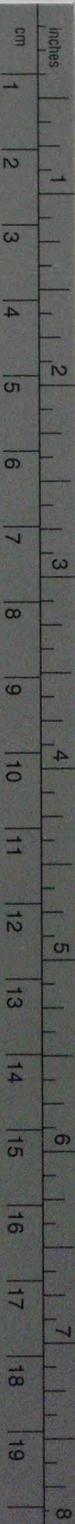
4
110
31-1939
25000 46877

Kodak Gray Scale



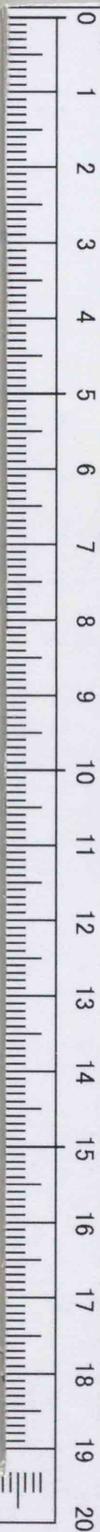
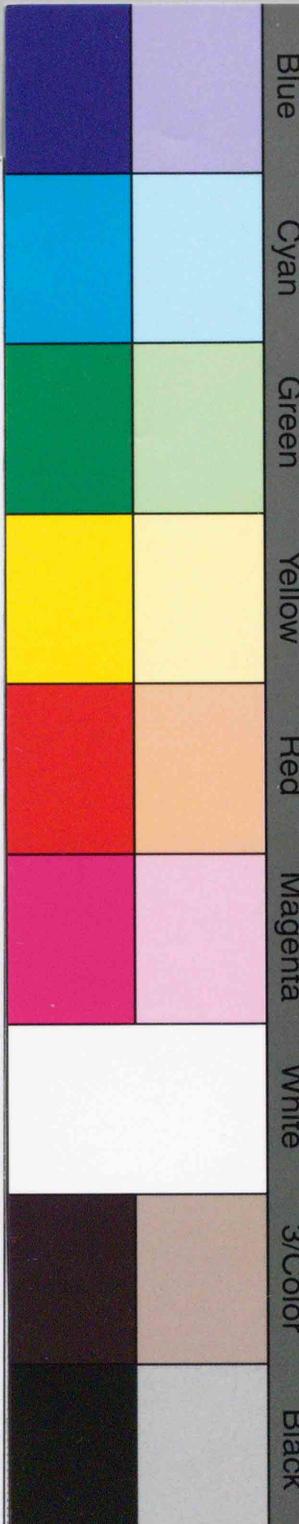
© Kodak, 2007. TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007. TM: Kodak



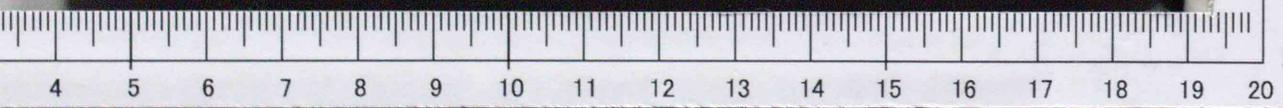
教科書文庫

4
110
31-1939
2500046877

尋常小學修身書 卷三

兒童用

文部省





教科書文庫
4
110
31-1939
2500046877



尋常小學修身書

文部省

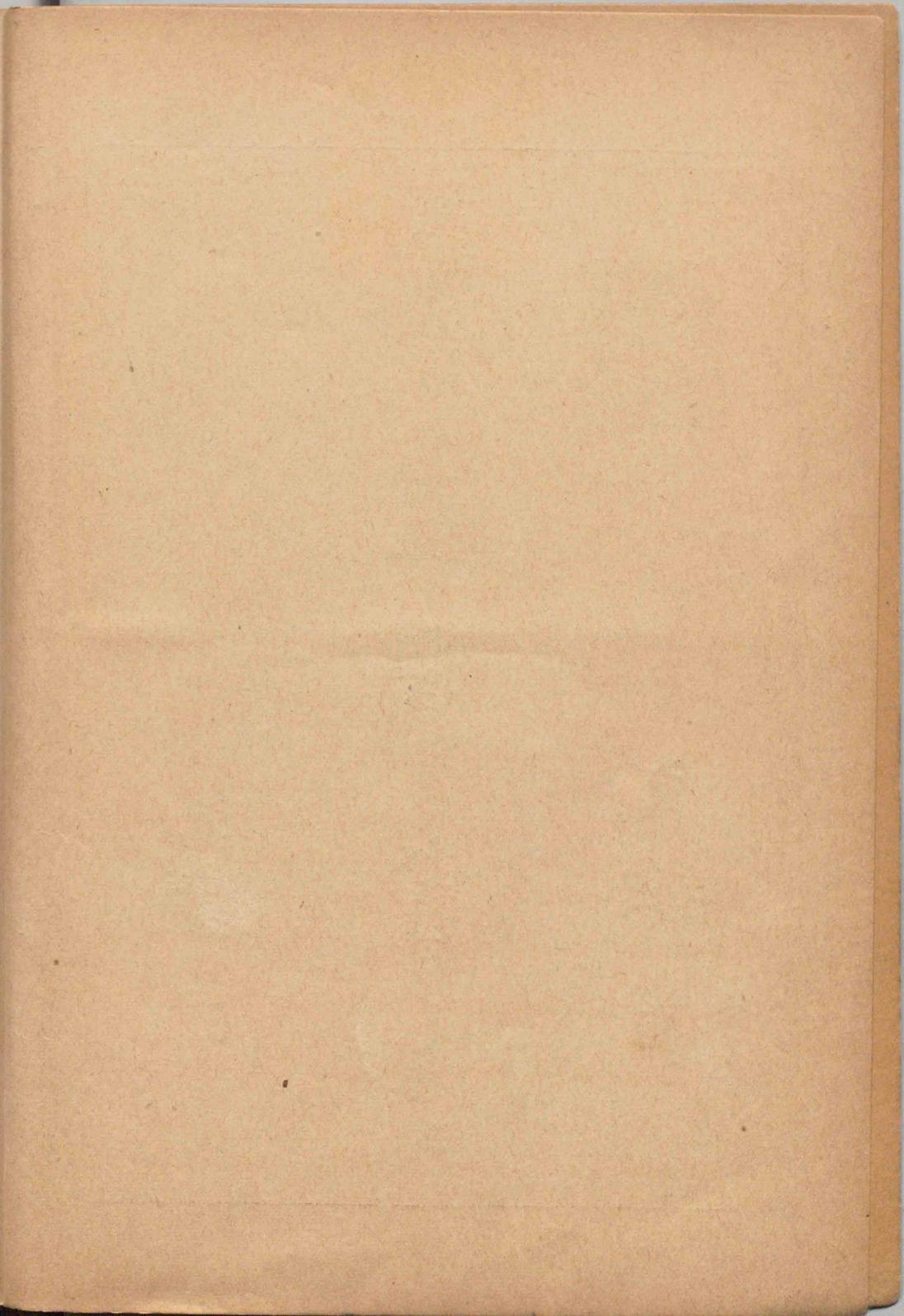
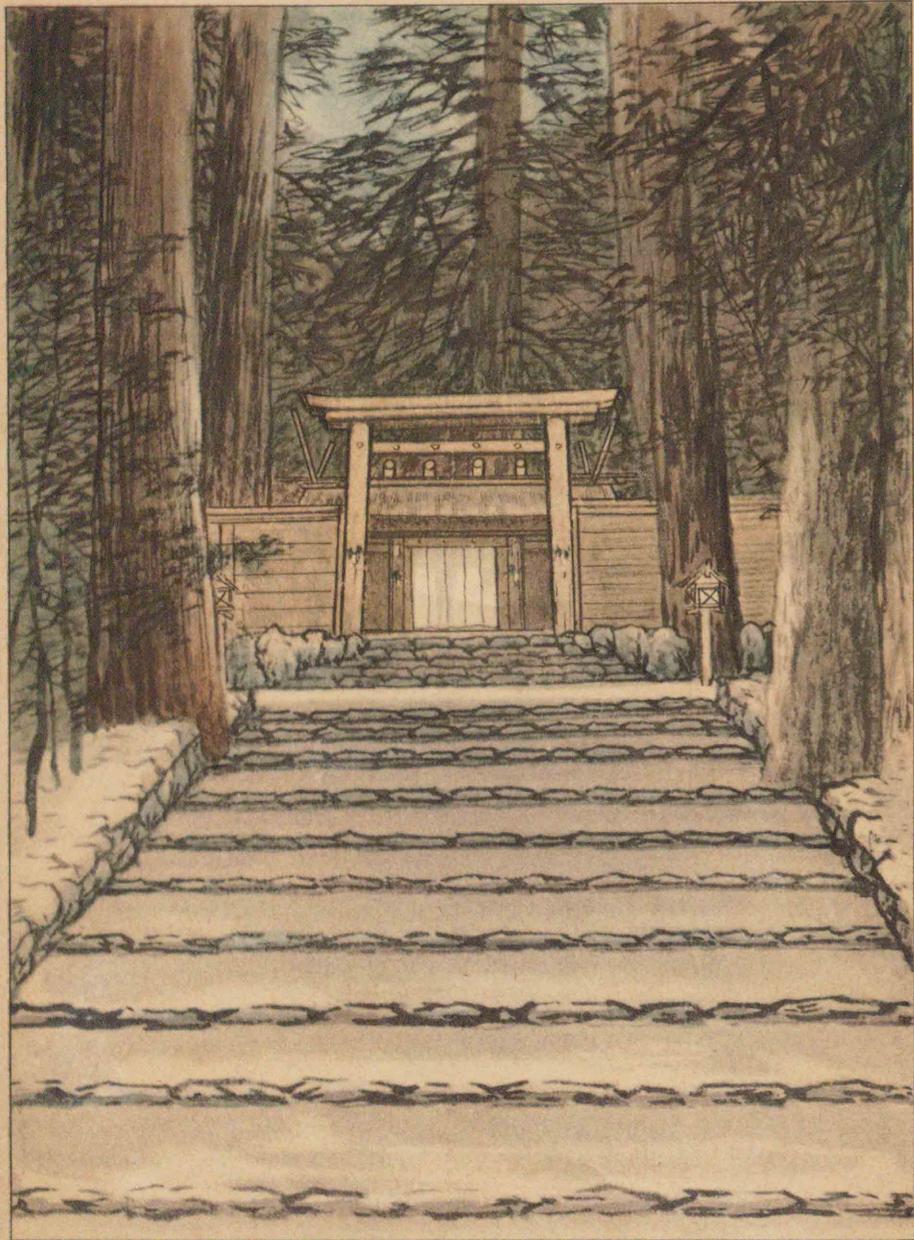
兒童用

登録番号	46877
分類	375.9 M

卷三

広島大学図書
2500046877



もくろく

一	私たちの學校	一
二	先生をうやまへ	五
三	友だち	九
四	かうかう	十三
五	しごとにはげめ	十七
六	がくもん	二十一
七	せいとん	二十四
八	ぎやうぎ	二十七
九	生き物をあはれめ	三十
十	おんを忘れるな	三十三
十一	ものごとにあわてるな	三十六
十二	かんにん	四十
十三	ゆうき	四十三
十四	正直	四十六
十五	けんかう	五十一
十六	明治節 <small>めいぢせつ</small>	五十六
十七	國旗 <small>こくき</small>	五十九
十八	きそくをまもれ	六十三
十九	けんやく	六十六
二十	じぜん	六十九
二十一	皇大神宮 <small>くわうだいじんぐう</small>	七十三
二十二	忠君愛國 <small>ちゆうくんあいこく</small>	七十六
二十三	協同 <small>けいどう</small>	八十
二十四	近所の人	八十四
二十五	こうえき	八十七
二十六	皇后陛下 <small>くわうこうへいか</small>	九十
二十七	よい日本人	九十四

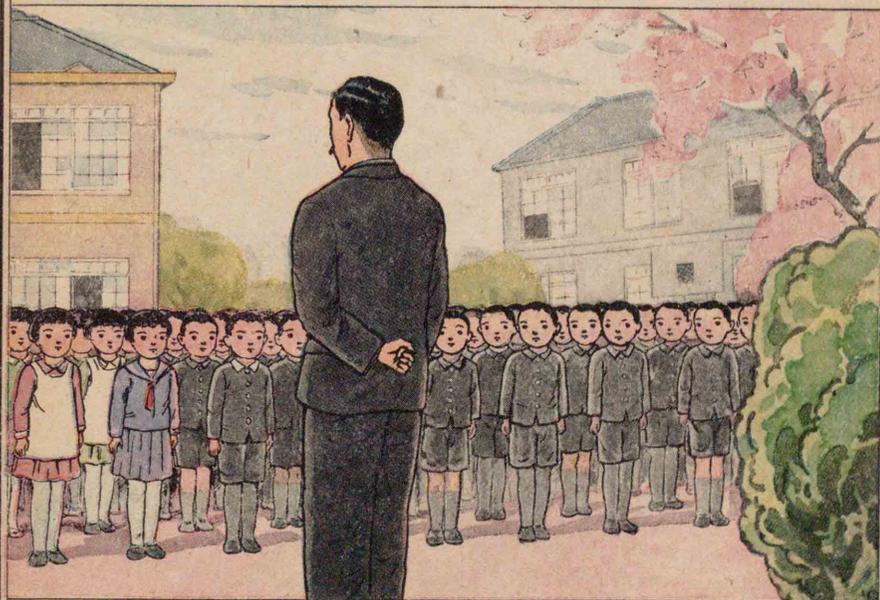
尋修三

一 私たちの學校

太郎や竹子たちの學校では、この間の學校のきねん日に、校長先生が、次のやうなお話をなさいました。

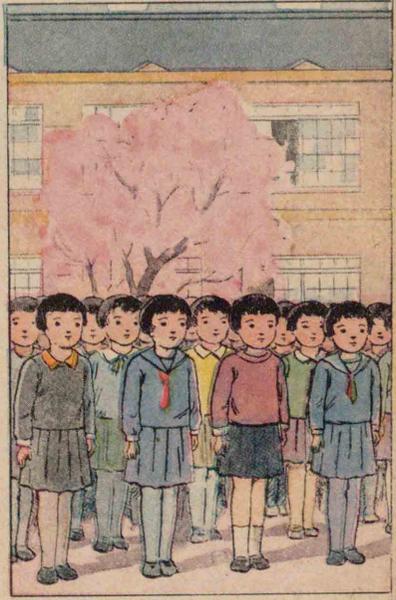
「私たちの學校が始めて出來たのは、今から五十年も前のことです。そのころは、生徒もごく少かつたのですが、年々ふえて來て、今では、學校も、こんなに大きくなりました。」

この五十年の間には、親子きやうだいとも、この学校でまなんだうちもあつて、ずあぶんたくさんの人が出ました。それが、みんなりつぱな人になつて、それぐゝ自分のしごとにはげみ、世の中



尋修三

のためにつくしてあります。しやうばいをてびろくしてある人もあれば、町はづれで、せい出して田や畠をつくつてある人もあれば、こうばで、一生けんめいにはたらいてある人もあります。この町の町長ちやうちやうさんちやうも、四十年ほど前に、この学校を出た人です。また、女子ちよしは、よくうちををさめて、人のお手本になつて



あるものも少くありません。この外、軍人となつて、いくさに出ててがらをたてた人や、よそに行つて、よくはたらいてゐる人もありません。このやうにりつばな人をたくさん出したので、私たちの學校は、よい學校だといはれるやうになりました。

みなさんも、よく勉強して、一そり私たちの學校の名をあげるやうに心がけなければなりません。

太郎や竹子たちは、このお話を聞いて、自分たちも、もう三年生になつたのだから、みんな心を合はせて、先生のをしへをまもり、自分たちの學校を一そりよい學校にしよう。と思ひました。

二 先生をうやまへ

上杉鷹山は、米澤のどのさまで、その地方をさかんにして、人々のしあはせをはかつた人であります。

鷹山は十四の時から、江戸で、細井平洲といふがくしやについて、かくもんをしました。後になつて、平洲が江戸から米澤へまねかれたことがあります。その時、平洲はもう七十近い年よりでしたから、鷹山は、平洲が長いたびにつかれないやうにと、いろくゝ氣をつけました。平洲が米澤の近くに來ると、鷹山は、わざくゝ町はづれまで、むかへに出ました。さうして、ある寺の門の前で、平洲を待受けてみました。その

尋修三

うちに、平洲の乗つたかごがつきました。鷹山は、



「先生、ごきげんよろしうございます。」

と、ていねいにあいさつすると、あとはことばもなく、

たゞなつかしきになみだぐむばかりでした。それから、休んでもらふために、平洲を寺へあんないしました。が、門をはいつて長いさか道をのぼるのに、鷹山は、平洲より一足も先へ出ず、また、平洲がつまづかないやうに氣をつけて歩きました。

寺につくと、ざしきへ通して、

「先生、さぞおつかれでございましてせう。」
といつてなぐさめ、心をこめてもてなしました。

三 友だち

わが國で鐵の大砲たいはうが出来るやうになつたところのことです。たくさんの鐵をとかすためには、火に強いれんぐわで、大きな爐ろをつくらねばなりません。が、さういふよいれんぐわは、そのころうまく出来ませんでした。これをつくることをくふうした人に、飛田與七とびたよしちと福井仙吉ふくいせんきちといふ仲のよい二人のものがあります。

この二人は、水戸みとの
 どのさまのめいれ
 いを受けて、方々か
 ら石や土を取りよ
 せ、それでいろく
 とやいてみました
 が、どうもうまく行
 きません。しかし、
 國のためにだいじ



尋修三

なしごとですから、二人は、どうしてもしどげな
 ければならないと思つて、一生けんめいに助け
 合ひ、はげまし合つてみました。
 そのうちに、仙吉は、あやまちがあつたので、この
 しごとをやめさせられてしまひました。たよ
 りにする友だちをうしなつた與七は、しごとも
 手につかないほど悲しみました。さうして、い
 ろいろと仙吉のためにあやまつてやりました
 が、ゆるされませんでした。與七は、それから毎

日、仙吉の身の上を、自分のことのやうにしんばいし、物をおくつてしんせつになぐさめたり、もともと通りつとめられるやうに、神様においのりしたりしてゐました。

一年ほどたつと、どのさまも、與七のまごころにかんしんして、また仙吉を使ふことになりました。二人の喜はたとへやうもなく、たがひに手を取合つて、うれし泣きに泣きました。

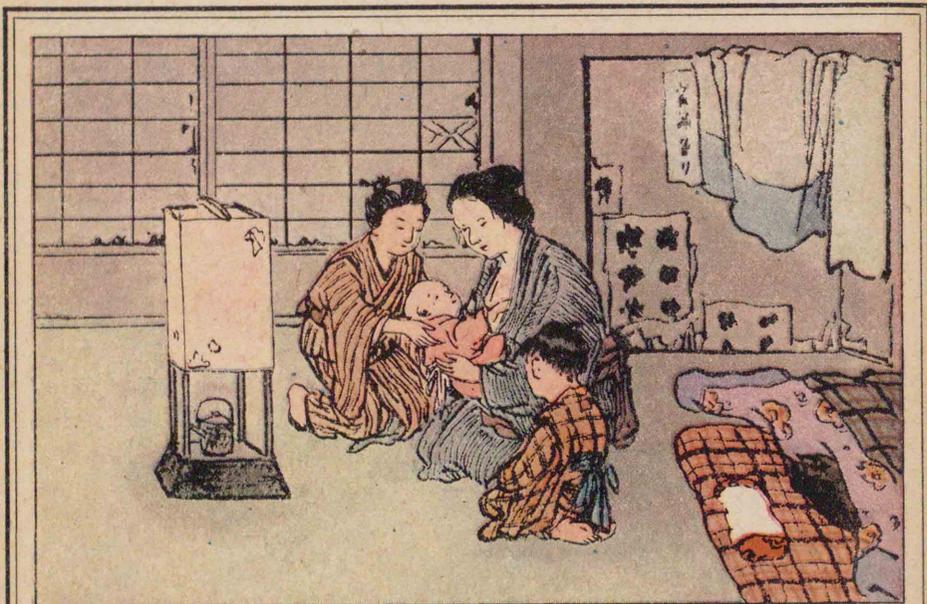
二人は、それから、一そり力を合はせてしごと

はげみ、とうく、大そり火に強いれんぐわをつくり上げました。このれんぐわで、大きな爐をつくりました。かうして、仲のよい二人の友だちの力で、りつばな鐵の大砲が、こゝでも出来るやうになりました。

四 かうかう

二宮金次郎は、家が大そりびんぼふであつたので、小さい時から、父母の手助けをしました。

金次郎が十四の時、父がなくなりました。母は、くらしにこまつて、金次郎と次の子を家におき、すゑのちのみごをしんるゐにあづけました。しかし、母はその日からあづけた子のことが氣にかゝつて、夜もよく眠れません。「今ごろは、目をさまして、ちゝをさがして泣いてゐるであらう。」と思ふど、かはいさうでならなくなり、いつもこつそり泣いてみました。金次郎は、それに氣がついて、



「おかあさん、どうしておやすみになりましたか。」
と聞きましたが、母は、「しんぱいしないで、おやすみ。」
といふだけでした。金次郎は、「これは、きつとあづけた弟のことをしん

ばいしていらつしやるのにちがひない。」と思つて、

「おかあさん、弟をうちへ連れてかへりませう。赤んぼうが一人ぐらゐゐたつて、何でもありません。私が、一生けんめいにはたりますから。」

といひました。母は大そう喜んで、すぐにしんるゐへ行つて、赤んぼうを連れてもどりました。親子四人は、一しよに集つて喜び合ひました。

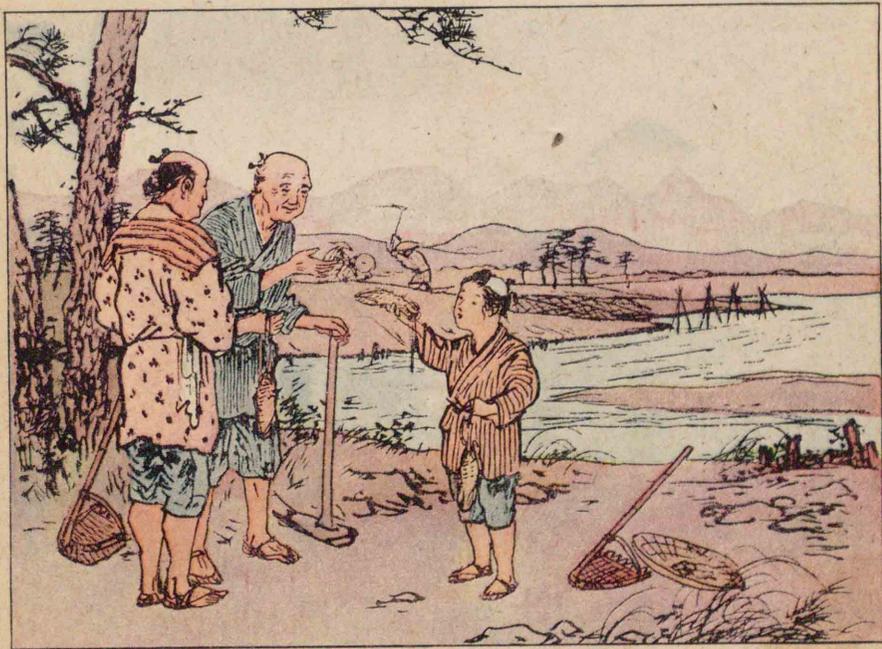
孝^{カウ}ハ徳^{トク}ノハジメ。

五 しごとにはげめ

金次郎の村のさかひを流れてゐる川には、たびたび大水が出て、土手をこはしました。そのために、村では、どの家からも一人づつ出て、毎年川ぶしんをしました。

金次郎も、年は若いがこの川ぶしんに出てはたらきました。しかし、まだ力がたらないので、お

となにはかなはない
と思つて、どうかして
しごとのたしになる
ことはないかとかん
がへました。さうし
て、晝のしごとをすま
して家へかへると、夜
おそくまでおきてあ
てわらぢをつくり、あ



尋修三

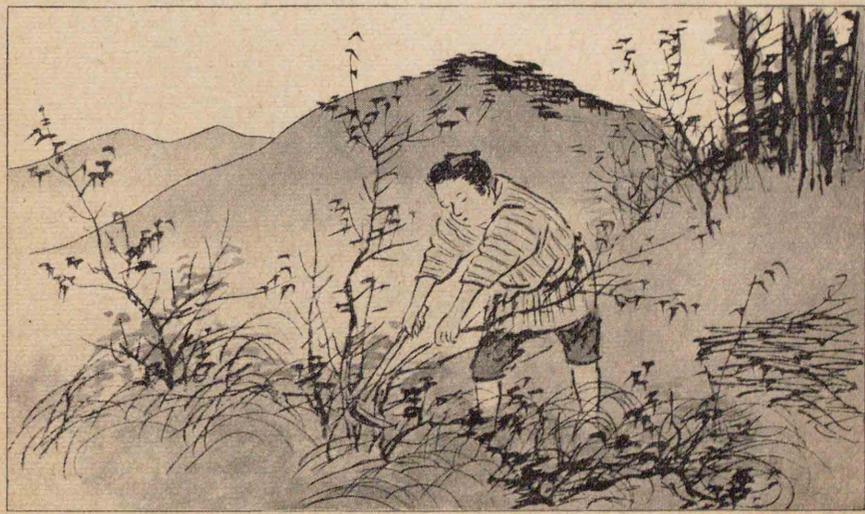
くる朝、それをしごとばへ持つて行つて、

「私は、まだ一人前のしごとが出来ませんから、
みなさんのおせわになります。これはその
おれいです。」

といつて、みんなの人におくりました。しかし、
金次郎は、人の休んでゐる間でも、休まずはたら
いたので、土や石をはこぶことは、かへつておと
なよりも多いほどでした。

金次郎は、家のしごとにもよくはたらきました。

朝は早くから山へ行つて、
しばをかり、たきぐをと、
それを賣つて金にかへま
した。また、夜はなはをな
つたり、わらぢをつくつた
りして、少しのじかんもむ
だにしませんでした。か
うして、母^はを助けて、小さい
弟たちをやしなひました。



六 がくもん

金次郎が十六の時、母^はがなくなりまして。それ
で、二人の弟は、母の生まれた家に引取られ、金次
郎は、をぢの家にせわになることになりました。
金次郎は、をぢのいひつけをまもつて、一日中、よ
くはたらきました。さうして、夜になると、本を
読み、字をならひ、さんじゆつのけいこをしまし
た。しかし、をぢは、あぶらがいるので、がくもん

をすることをとめました。金次郎は、自分は、しあはせがわるくて、よそのせわになつてゐるが、今がくもんをしておかないと、一生むがくの人になつて、家をさかんにすることも出来まい。自分であぶらをもとめてがくもんをするのなら、よからう。と思ひました。

そこで、自分であれ地を開いてあぶらなをつくり、そのたねをあぶらやへ持つて行き、あぶらに取りかへてもらつて、毎晩、がくもんをしました。

尋修三



しかし、をぢがまた、「本を読むよりも、うちのしごとをせよ。」といひましたので、夜おそくまでをぢの家のしごとをして、その後で、がくもんをしました。

二十さいの時、金次郎は、あれはてた自分の家へ

もどりました。さうして、一生けんめいにはたらいて田や畠を買ひもどし、家もさかんにしました。また、世のため、人のためにつくして、後々までもたつとばれる、りつぱな人になりました。

七 せいとん

もとをりのりなが
本居宣長は、わが國の昔の本を讀んで、日本が大そうりつぱな國であることを人々に知らせた、名高いがくしやであります。



宣長は、たくさんの本を持つてあましたが、一々本箱に入れて、よくせいとんしておきました。それで、夜、あかりをつけなくても、思ふやうに、どの本でも取出すことが出来ました。

宣長は、いつもうちの人

に向かつて、

「どんな物でも、それをさがす時のことを思つたなら、しまふ時に氣をつけなければなりません。入れる時に、少しのめんだうはあつても、いる時に、早く出せる方がよろしい。」
といつて聞かせました。

宣長が名高いがくしやになり、りつぱなしごとのこしたのには、へいぜい物をよくせいどんしておいたことが、どれだけやくにたつたか知

れません。

ハ　ぎやうぎ

松平好房は、まつだいらよしふさ小さい時からぎやうぎのよい人で、自分の居間にをる時でも、ちち父母のをられる方へ足をのばしたことは、けつしてありませんでした。よそへ行く時には、そのことを父母につげかへつて来た時には、きつと父母の前へ出て、「たゞ今かへりました。」

といつてあいさつをし、それから、その日にあつたことを話しました。

好房は、父母から物をもらふ時は、ていねいにおじぎをしてそれを受け、いつまでもたいせつに持つてゐました。また、遠くへ出られた父母から手紙をもらつた時は、



尋修三

まづいたゞいてから開き、讀終ると、またいたゞいてそれをしまひました。

父母が何かおつしやる時には、好房は、ぎやうぎよく聞いて、おつしやることにそむかないやうにし、また人が好房の父母の話をする時でも、すわりなほして聞きました。

好房はこのやうに、父母をうやまつてぎやうぎがよかつたばかりでなく、しんるゐの人にも、おきやくにも、いつもぎやうぎよくしましたので、

好房をほめないものはありませんでした。

九 生き物をあはれめ

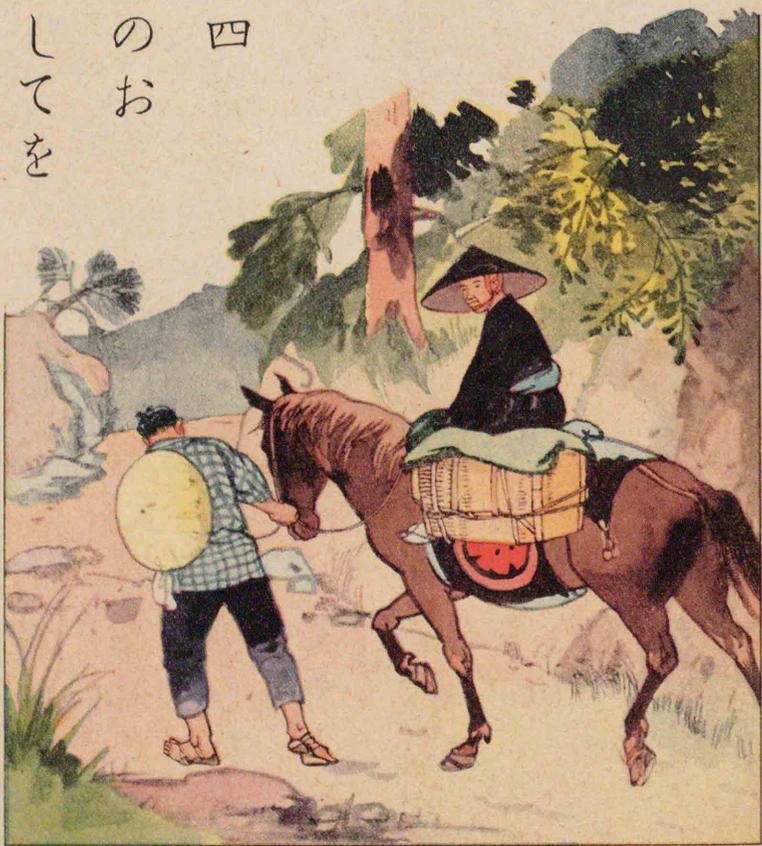
昔、木曾山中に、孫兵衛といふ馬方がありました。ある時、一人の僧がその馬に乘りました。道のあるい所にかゝると、そのたびに、孫兵衛は、馬のにかたを入れて、

「おつと、親方あぶない、あぶない。」

といつて、馬をたすけてやりました。僧はふし

ぎに思つて、
そのわけを
尋ねました。
すると、孫兵衛
は、

「私ども親子四人はこの馬のおかげでくらしてをりますから、馬とは思はず、親方と思つていた



はるのでございます。

と答へました。

やくそくした所へついたので、僧はちんせんを
はらひました。孫兵衛は、まづその中でもちを
買つて、馬にたべさせました。さうして、自分の
家の前へ行くと、孫兵衛のつまと子が、馬のいな
なきを聞きつけて、むかへに出て来て、さつそく
馬にまぐさをやりました。

僧はそれを見て、孫兵衛のうち中が、みんな心が

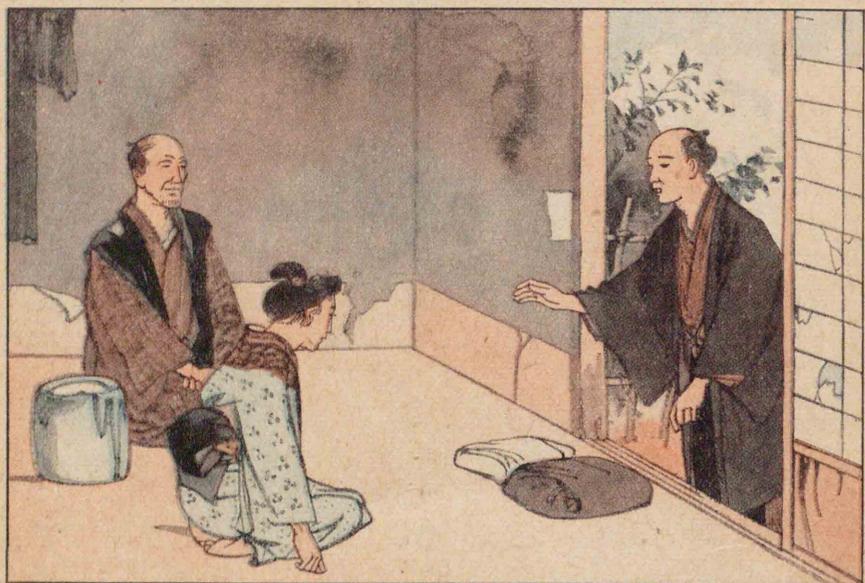
けのよいのに、大そうかんしんしました。

十 おんを忘れるな

永田佐吉は、十一の時、みなかから出て来て、名古屋
屋のある紙屋にほうこうしました。佐吉は、正
直者で、よくはたらく上に、ひまがあると、手なら
ひをしたり、本を讀んだりしてたのしんであま
したから、大そうしゆじんにかはいがられました
た。しかし、仲間のものどもは、佐吉をねたんで、

店から出してしまふやうに、いくともしゆじんにねがひ出ました。しゆじんは、しかたなく、佐吉にひまをやりました。

佐吉は、家にかへつてから、わたの仲買などをしてくらしてみましたが、しゆじんをうらむやうなことは少しもなく、いつも、せわになつたおんを忘れませんでした。さうして、買出しに出た道のついでなどには、きつと紙屋へ行つて、しゆじんのごきげんをうかがひました。



その後、紙屋は、大そうおとろへて、見るのも氣のどくなありさまになり、長い間せわになつてゐたほうこう人も、誰一人出入をしなくなりました。しかし、佐吉だけは、時々見まひに行き、いろいろの物をおくつてし

ゆじんをなくさめ、そのくらしを助けました。

十一 ものごとにあわてるな

ある日、しづ子の家では、おばあさんと、しづ子と、それから五つになる妹と三人が、夕ごはんをたべてみました。すると、にはかに、ごうといふ音がして、家がひどくゆれ出しました。「これは大きいぢしんだ。」と思つたが、にげ出すひまもなく、家がたふれて、みんなそのしたじきになつてし

まひました。しかし、うんよく、三人ともけがはしませんでした。妹は、おばあさんにすがりついて、泣出しました。あちらでも、こちらでも、助けを呼ぶ聲が聞えて來ます。

しづ子は、まづ、おばあさんも、妹も、ぶじであることをたしかめました。それから、はつて行つて、みんながぬけ出るすきまを見つけました。その時、ふと見ると、家の中に、くわじが起りかけてゐる所があります。「これは大へんだ。」と思つて、

急いでおばあさんと妹とを連れて、見つけておいたすきまからはひ出しました。それから、

「おばあさん、こゝでちよつと待つてゐて下さい。

私は火をけして來ますから。」

といつて、うらのみどの水をバケツに



尋修三

くんでは、火の上にかけて、とうく火をけしてしまひました。しづ子は、もう大ぢやうぶと思つてから、おばあさんと妹とをあぶなくない所へ連れて行きました。

もし、しづ子の家からくわじが出たら、すぐどなりの學校にもえうつり、その先にある、風下かざしもの二十けんばかりの家も、みんなやけてしまふところでした。

家のことをしんぱいして、急いでかへつて來た

しづ子のおとうさんとおかあさんは、しづ子のおちついたはたらきぶりを聞くと、

「しづ子、よくやつてくれた。」

といつて、なみだを流して喜びました。

十二 かんにん

木村重成は、豊臣秀頼のけらいで、小さい時から、秀頼のそば近くつかへました。

重成が十二三のころのことです。ある日、大阪

の城の中で、さうぢ坊主とおもしろくたはむれてみました。が、どうしたわけか、相手が、急に本氣になつて、大そう腹を立て、さんぐ悪口をいつた上、重成にうつてかゝらうとしました。み合はせたおとなの人たちは、どうなることかとしんぱいしました。重成は、ぶれいなことをすると思ひましたが、じつところへて取合はず、そのまま、おくへはいりました。人々は、いぐわいに思つて、重成をおく

びやうものだといつて笑ひました。それから、さうぢ坊主が、いばつてしかたがありませんでした。後に、秀頼が徳川家康といくさをした時、重成は、人をおどろかすほどの勇ましいはた



尋修三

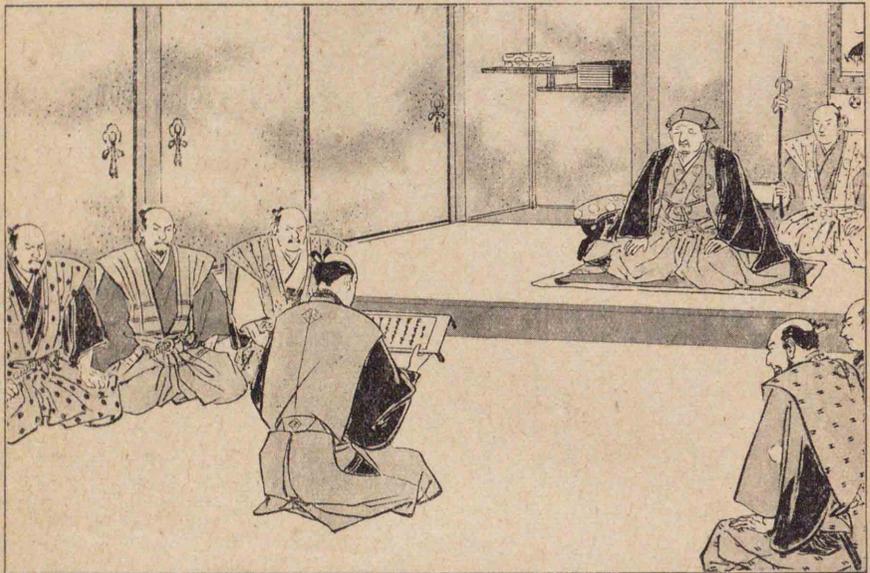
らきをしました。そこで、前に重成をおくびやうものだといつて笑つた人たちまでが、「重成こそ、ほんたうのゆうきのある人だ。」といつて、かんしんしました。

ナラヌカンニン、スルガカンニン。

十三 ゆうき

家康が、大軍を引連れて、秀頼のある大阪の城にせめて来た時のことです。重成は、二十さいば

かりでしたが、一方の大將となつて、城からうつて出て、大ぜいの敵とたゝかひ、勇ましいはたらきをして、敵みかたをおどろかしました。後に、いくさの仲なほりをする事になつて、重成は、家康のぢんやへ使に行きました。重成は、家康始め、大ぜいの敵の大將の並んでゐる所へ出ましたが、びくともしません。そのうち、書き物を受取る事になりましたが見ると、家康のけつぱんがうすいので、



「もう一度、目の前でしなほして下さい。」と、少しもおそれずいひました。しかし、家康は、「年をとつたかげんで、うすいのだらう。」といつて、聞入れないやうでした。けれども、重成がたゞだまつてす

わつてみますので、家康もしかたがなく、とうとうけつぱんをしなほして、重成に渡しました。重成がかへつた後で、家康を始め、そばにゐた大將たちは、みんな重成のりつぱなふるまひをほめました。

十四 正直

昔、正直な馬方がありました。

或日、馬方は、一人のひきやくを馬に乗せて遠い

所へ送つて行きましたが、家にかへつて馬のくらをおろすと、金のたくさんはいつて居るさいふが出ました。「これは、さつき乗つたひきやくの忘れた物にちがひない。」と思つて、つかれて居るのに、遠い道もかまはず、すぐに走つて行つて、ひきやくにあひました。さうして、くはしく尋ねた上で、其のさいふを渡しました。ひきやくは、大そう喜んで、

「此の金がなくなると、私の命もあぶないところ

ろでした。あなた
 のごおんは、ことば
 で言ひつくすこと
 が出来ません。
 と、ていねいにれいを
 のべました。それか
 ら、別に持つて居た金
 を取出し、

「これは、わづかです



が、おれいのしるしに受取つて下さい。」
 と言ひながら、馬方の前へさし出しました。馬
 方は、おどろいて、

「あなたの物をあなたが受取りになるのに、
 おれいをいたゞくわけがありません。」

と言つて、手もふれませんが、ひきやくがいくら
 すゝめても、どうしても受取らず、其のまゝ、かへ
 らうとします。ひきやくは、どうかして受取つ
 てもらはうと思つて、金をだんくへらして、し

まひには、ごくわづかにして、

「せめてこればかりは、どうぞ受取つて下さい。
でないど、私はねてもねられません。」

と、むりにすゝめました。馬方は、

「おれいをいたゞいてはすみませんが、そんな
にまでおつしやいますなら、今夜、休むところ
をこゝまで来ました。ただちんだけ、此の中から
いただきますせう。」

と言つて、ほんのわづかの金を受取りました。

十五 けんかう

おやへは、学校にはいつてから、時々病氣をしま
した。寒い時には、よくかぜをひき、暑い頃には、

よくおなかをいたためま
した。其の度におどろ
さんおかあさんは、おや
への弱いのを、どうかし
て丈夫にしようと思つ

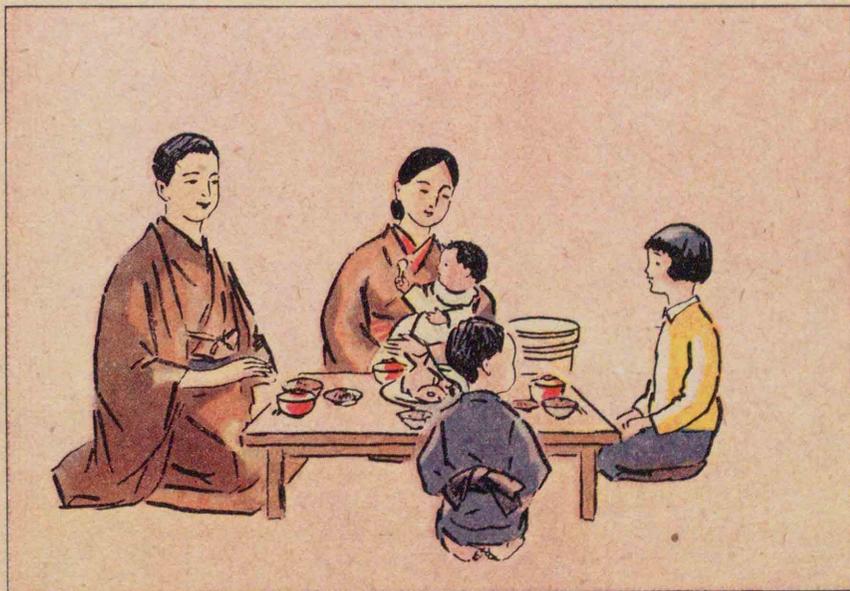


て、くすりを飲ませたり、たべ物に氣をつけさせたりして、いろくせわをして下さいました。おやへも、出来るだけよく氣をつけて、けんかうなからだになり、おとうさん、おかあさんを安心させようと思ひました。さうして、夜は早くねてよく眠り、朝は早く起きてよい空氣を吸ふやうにしました。うちに居ても、おさらひやしよくじのじかんをたがへず、何事もきまりよくしました。たべ物にも氣をつけて、たべ過ぎをせ

ず、すききらひも言ひませんでした。ひふも、暑い頃からならして行つて、しだいに丈夫になりましたので、冬も、あつぎをしないでよいやうになりました。また、空氣がよく、日あたりのよい所に出で、たいさうをしたり、なはとびをしたりしてうんどうをしました。

此のやうにして、そろくとかからだを丈夫にするにつとめましたので、きよねんの冬は、一度もかぜをひかず、今年の夏も、一度もおなかを

いためませんでした。
 秋になつてからは、急に
 からだの目方もふえ、此
 の頃のおやへは、前と見
 ちがへるやうにけんか
 うになりましたので、お
 どうさん、おかあさんは、
 大そうお喜びになつて
 居ます。さうして、此の



間のおやへのたんじやう日には、おやへのけん
 かうをいはつて、

「おやへは、近頃、生まれかはつたやうに丈夫に
 なつた。」

とおつしやいました。おやへもうれしくてな
 りません。これからも、もつともつと丈夫にな
 つて、學校で一番のけんかうじどうにならうと
 思ひました。

クスリヨリ、ヤウジヤウ。

十六 明治節

我が國の祝日は、新年・紀元節・天長節・明治節でございます。新年は、一月一日・二日・五日で、年の始をいはひ、紀元節は、二月十一日で、神武天皇がごそくみの禮をおあげになつた日をいはひ、天長節は、四月二十九日で、天皇陛下のお生まれになつた日をいはふのでございます。

明治節は、十一月三日で、明治天皇のごおんをあ

尋修三



ふぎ、明治の御代の榮をいはふ日でございます。此の日、宮中では、おごそかな御儀式があり、明治神宮では、にぎやかなおまつりがございます。神武天皇が我が國のもとおかためになつてから、御代々の天皇は、其

の御あとをうけついで、しんみんを子のやうに
 おいつくしみになり、我が國をさかんになさい
 ました。明治天皇は、長い明治の御代の間に、し
 んみんのしあはせをおはかりになり、我が國が、
 世界の國々にまけないほどに開け進むやうに
 なさいました。それから、我が國は、朝日ののぼ
 るやうないきほひで、さかんになつて來たので
 ございます。

私たちは、いつも明治天皇のごおんを忘れず、よ

い日本人となつて、ますく我が國をさかんに
 するやうにしなればなりません。

十七 國旗

けふは明治節です。どの家にも、日の丸の旗が、
 朝風にいきほひよくひるがへつて居ます。

此の村には、もと祝日に日の丸の旗の立たない
 家もあつたさうです。それが、今から十年ほど
 前に、村中さうだんして、どの家でも日の丸の旗

を作りました。さうして、いつもは、しぶ引のふくろに入れ、ふくろの上に旗を立てる日を書いて、神棚の下にかけて置くことにしました。それからは、此の村には、祝日や祭日さいじつに旗の立たない家は、一けんもなくな

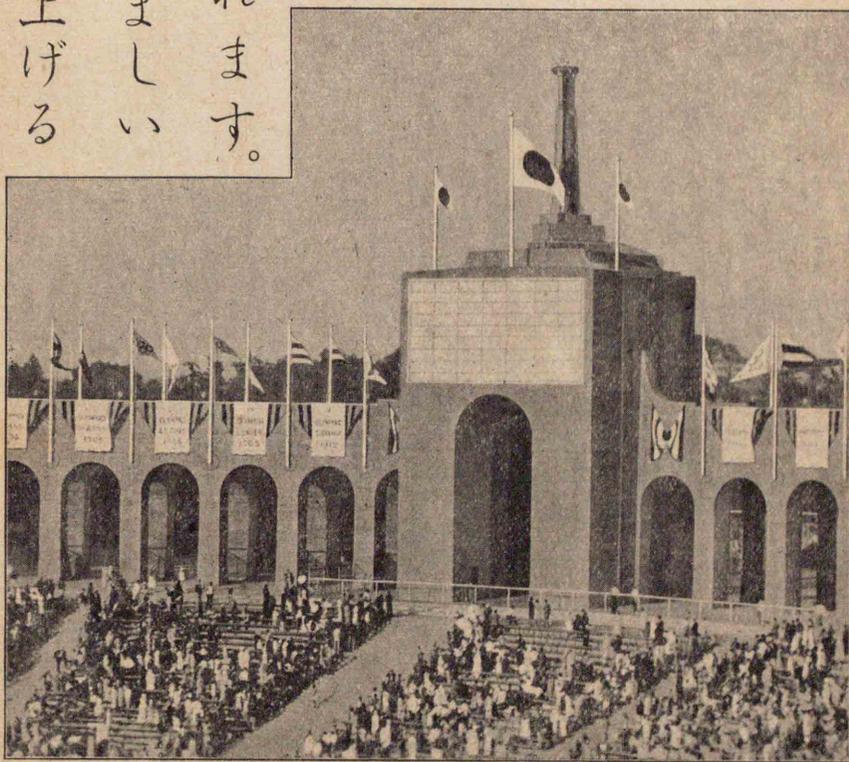


つたといふことです。

どの國にも、其の國のしるしの旗があります。これを國旗といひます。日の丸の旗は日本の國旗です。我が國の祝日や祭日には、學校でも、家々でも、國旗を立てます。これは、國民こくみんが、祝日には、おいはひの心持をあらはし、祭日には、つゝしみの心持をあらはすためです。

日本の船ふねが外國のみなどにとまる時には、日の丸の旗を立てます。また、國々のうんどうせん

しゆが集つて、きやうぎをする時にも、日本のせんしゆが勝つと、君が代そらがの奏樂そうがくとともに、日の丸の旗が高くあげられます。かういふ時に、勇ましい日の丸の旗を見上げる



尋修三

と、日本人の胸は、國を愛する心で一ぱいになり、思はず涙が出ます。

日の丸の旗は、日本のしるしですから、私たち日本人は、誰でもこれを大切にします。それと同じやうに、外國の人も、自分の國の國旗を大切にします。私たちは、外國の國旗にも、れいぎをうしなはないやうに心がけませう。

十八 きそくをまもれ

松平定信は、まつだいらさだのぶばくふの重い役人でありました。或年、地方に見まはりに出かけた時、或せきしよ關所を通りました。其の時、定信は何の氣なしにかさをかぶつたまゝ、通り抜けようとなりました。すると、關所の役人の一人が、

「關所のきそくですから、かさをおとり下さい。」
 と言つて、ちゆういしました。定信は、それを聞いて、

「なるほど、さうだつた。」



と言つて、すぐにかさをとつて通りました。其の日、やどに着いてから、定信はその土地の上役の者に、

「けふ、かさをかぶつたまゝ、關所を通らうとしたのは、まことに自分のふこゝ、」

ろえであつた。それをちゆういしてくれた
役人にあつくおれいを傳へてもらひたい。
と言つて、ていねいにあいさつしました。

十九 けんやく

徳川とくがは光圀みつくには、水戸みづとのどのさまで、大日本史しといふ
名高いれきしの本を作つて、皇室くわうしつのたふといこ
とを廣く世よに知らせた人であります。

光圀は、何ふじいひのない身分でありながら、い

つも、けんやくをまもりました。へいぜいの着
物やたべ物も、そまつなものでした。居間の作
りもそまつで、其の上せまくて、んじやうやかべ
は、すつかりほぐではつてありました。それも、
ごみさへ落ちなければよいといふので、よそか
ら來た手紙などをつかつて、自分ではつたので
した。

光圀は、紙をていねいにつかひました。へいぜ
い、ものを書くには、大てい、ほぐのうらをつかひ

ました。それに、女中
たちは、紙をそまつに
つかふので、光圀は、そ
れをやめさせようと
思ひ、或冬の日、紙す
き場を見せにやりま
した。其の日は、寒い
寒い日でしたが、紙す
きの女たちは、川風に



尋修三

吹かれながら、つめたい水にはいつて、手も足も
まつかにしてはたらいで居ました。女中たち
は、此の様子を見て、自分たちのつかふ紙が、どん
なに人々のくらのうのおかげで出来るかといふ
ことがわかつたので、それから、一枚でも、そま
つにしないやうになりました。

二十 じぜん

昔、鶴岡に、鈴木今右衛門といふなさけ深い人が

ありました。大き、んのあつた時、自分のうちの金や米・麥などを出して、うゑた人を助けました。それでも、まだうゑ死する人がありますので、田や畠を始め、家のだうぐまで賣つて、たくさんの人をすくひました。

今右衛門のつまも、心だてのよい人で、持つて居た着物などは、大方賣つて人を助けましたが、晴着がまだ二枚だけ残つて居ましたので、それも賣りはらはうとしました。今右衛門が、

「外へ出るのに、着がへの一つぐらゐはあつた方がよからう。それだけは、残しておいたらどうか。」

と言ひますと、つまは、

「着がへがあると、外へも出るやうになります。着がへがなくなつて、外へ出る事が出来なければ、くしやかんざしもいりません。残らず賣つても、つとたくさんの人を助けませう。」
と言つて、晴着と一しよに、くしやかんざしも賣

つてしまひました。
今右衛門ふうふに、十二
になる娘がありました。
或寒い日、同じ年頃の女
の子が、物もらひに來ま
した。母は、それを見て、
娘に、

「お前は、わたいいれを二
枚重ねて着て暖にし



尋修三

尋修三

て居るが、あの子は、ひとへもの一枚でふるへ
て居ます。一枚やつてはどうです。
と言ひますと、娘は、すぐ、上に着て居るよい方の
をぬいで、其の子にやりました。

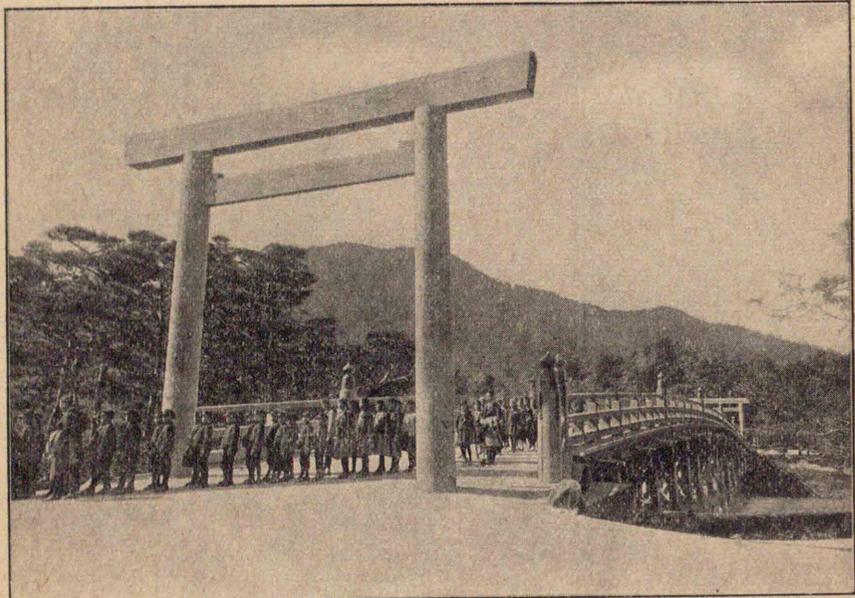
我が身ヲツメツテ、人ノ痛サヲ知レ。

二十一 皇大神宮

千年のみどりをこめた杉の木のしげり合つた
中に、たふといお宮がをがまれます。此のゑは、

伊勢いせの皇大神宮の御ありさまを、おうつし申し
たものでございます。

皇大神宮は、天皇陛下へいかのごせんぞ天照大神あまてらすおほみかみをお
まつり申してある、もつともたふといお宮でござ
います。御代々の天皇は、此のお宮をあつく
おうやまひになりました。陛下におかせられ
ても、皇大神宮をおうやまひになつて、つねに御
大切に、あそばされます。毎年、おもだつたおま
つりには、お使をおつかはしになつて、御供物を



おあげになります。ま
た皇室くわうしつや國だいじに大事のあ
る時は、きつと其の御事
をおつげになります。
國民こくみんも、昔から、皇大神宮
を深く、うやまつて、遠方
に住んで居る者でも、一
生のうちせめて一度は
參宮をしたいとねがは

ない者はありません。

二十二 忠君愛國

明治三十七八年戦役の時、陸軍騎兵大尉小林環は、上官のめいれいを受けて、度々敵の陣地に深くはいりこんで、敵の様子をさぐり、りつばなてがらをたてました。



或時、大尉は、敵の目をのがれるために、まづしい支那人に姿をかへ、

はだしのまゝで、やみにまぎれて出かけました。とちゆうで敵にあやしまれ、何度もどがめられたり、どらへられたりして、大そうなんぎをしました。しかし、いつもおしのまねをして、あやふいところをのがれ、しゅびよく敵の様子をさぐつてかへりました。



大尉の部下に、騎兵伍長向後三郎といふ人がありました。伍長もまた、大尉について、度々敵の様

子をさぐりに出かけましたが、いつも大尉を助けて、勇ましくはたらきました。

小林大尉と向後伍長は、しまひには、敵の陣地のずつと後の様子をさぐつて来い。といふ、重いめいれいを受けました。しかし、敵のまもりがきびしいので、進むことが出来ません。そこで、今度は満洲まんしゅうのひやくしやうに姿をかへ、荷馬車にばしゃに乗つて出かけました。それから、二人は、きびしい敵のまもりをくぐり抜けて、幾日も飲まず食

尋修三

はずのありさまで、満洲の奥深くまではいりこみました。さうして、敵のそなへをくはしく見とどけてかへる時、ざんねんにもとうとう敵に見破られてとらへられ、やがて



殺されることになりました。
しかし、二人は、しまひまで日本軍人であることを
を忘れず、おちつきはらつて、

「天皇陛下萬歳。」

ととなへ、勇ましいさいごをとげました。敵の
人たちも、大そう感心して、あつぱれ、軍人の手本
である。と、ほめない者はありませんでした。

二十三

協同

尋修三

昔、毛利元就といふ人がありました。元就には、
隆元、元春、隆景といふ三人の子があつて、元春、隆
景は、それ／＼別の家の名を名のることになり
ました。元就は、三人の子が、先々はなればなれ
になりはせぬかと心配して、いつも、三人が一つ
心になつて助け合ふやうに、といまして居ま
した。が、或時、三人に一つの書き物を渡しました。
それには、

「三人とも、毛利の家を大切に思ひ、たがひに、少



しでもへだて心を持つてはならない。隆元は二人の弟を愛し、元春・隆景はよく兄につかへよ。さうして、三人が一つ心になつて助け合へ。」と書いてありました。また、元就は、隆元に別の

書き物を渡しましたが、それにも、

「あの書き物をまもりとして、家の榮さかえをはかるやうにせよ。」

と、よく行きどぶいたいましめが書いてありました。

書き物をもらつた兄弟は、三人の名を書きならべた請書うけしよを父にさし出し、

「三人は、心を合はせて御いましめをまもりま

ど、かたくちかひました。

其の後、元就のあとをついだ隆元は早く死んで、其の子の輝元てるもとが家をつぎました。元春・隆景は、よく元就のいましめをまもつて輝元を助けましたので、毛利の家はながく榮えました。

二十四 近所の人

或村に、佐太郎さたらうといふ人がありました。うちがまづしいのに、近所の人には、いつもしんせつに

しました。

或時、佐太郎は、近所の家のわら屋根が大そうそんじて居るのを見て、なぜ早くなほさないのですか。と聞きますと、びんぼふで、なほすことが出来ません。といふへんじでした。佐太郎は、氣のどくに思ひ、村中の家からわらを四五はづつもらひ集め、自分も出して、それで屋根をふきかへさせました。また、村に火事くわじで家をやかれた人があつた時は、自分のやぶの竹を切つておくり

ました。

佐太郎が麥をまいて居る時、にはかに雨が降出しさうになつたことがありました。佐太郎は、急いで自分のしごとをかたづけて、近所のおくれて居る人のしごとを手傳ひました。日が暮



尋修三

れても、まだ終らなかつたので、せつかくのこやしなが流されるから」と言つて、たいまつをつけて、麥まきのすむまで手傳ひました。

二十五 こうえき

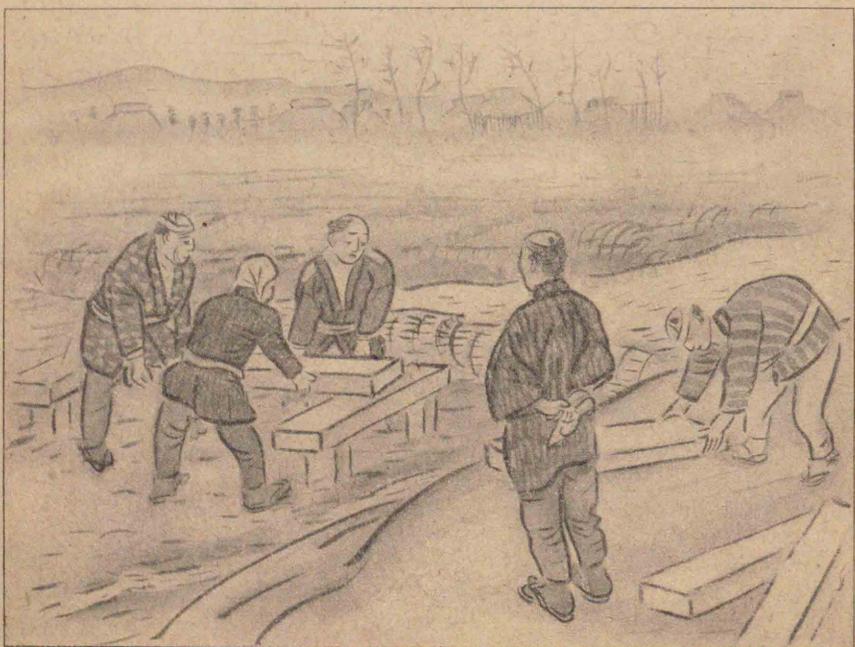
佐太郎は、しごとにねつしんでしたから、佐太郎の作る田や畠は、毎年よく出来ました。それで、人々は、佐太郎に尋ねて物を作るやうにしました。佐太郎は、作物の作り方を人に聞かれると、

しんせつに教へてやりました。また、田に水を引く頃は、よく田を見まはりました。が、人の田でも、水がかわいて居るとせき入れてやり、あまつて居るとはづしてやりました。また、夜ひまな時には、村の子供たちを集めて、いろは「や」九々を教へました。其の頃、村には学校がなかつたので、親たちは大そう喜びました。やがて、人々は、佐太郎にたのんで、村役人になつてもらひました。佐太郎は、いそがしい中から、

尋修三

尋修三

よく村のせわをしました。其の頃、村の川に一つの土橋がか、つて居ましたが、それが度々そんじて、人々がなんぎをしました。佐太郎は、仲間の役人たちとさうだんして、めいくのもらふき



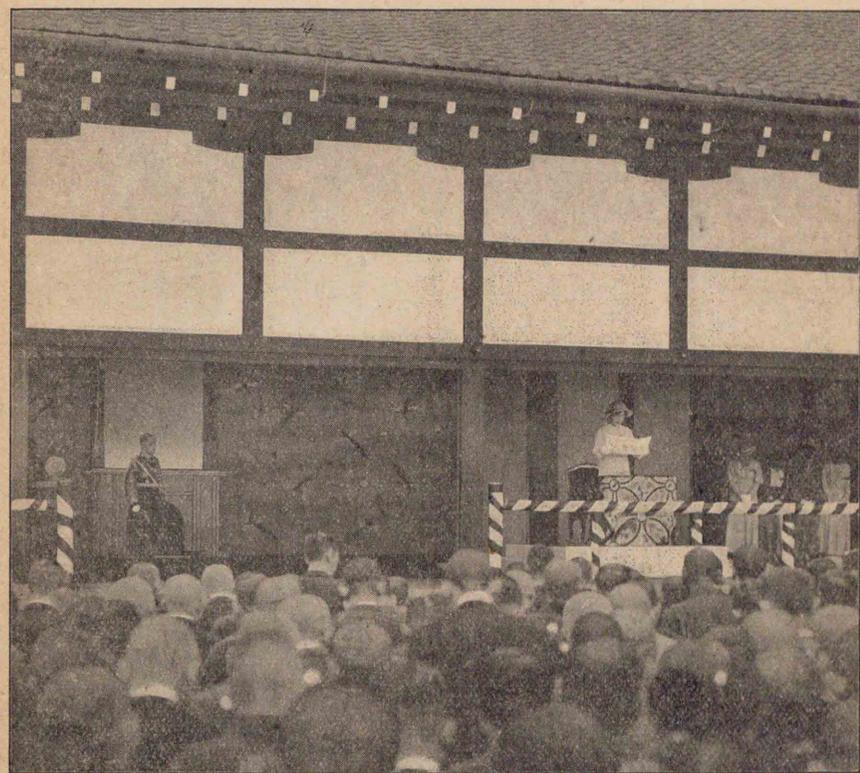
ふれうの中から、少しづつためて、其の金で、土橋を石橋にかけかへました。それから、ながく橋のそんじることがなくなつて、大そうべんりになりました。

其の外にも、佐太郎は、村のためになることをいゝろしたので、人々にたつとばれ、村役人のかしらに取立てられました。

二十六 皇后陛下くわうごうへいか

皇后陛下は、お小さい時から、きまりよくあらせられました。おもちひになるお品は、大切に取りあつかひになり、ごじしんでごせいとんなさいました。また、御ご學問がくもんやごうんどうなどの、日々のおきまりは、たゞしくおまもりになりました。

陛下は、大そうおなさけ深くあらせられて、人々をよくおいつくしみになりました。大正十二年に、くわんどうに大ぢしんがあつた時、ごじし



んでたくさんの
着物をおぬひに
なつて、困つて居
る人たちにたま
はりました。
陛下は、皇后にお
なりあそばして
から、日本赤十字
社のそうくわい

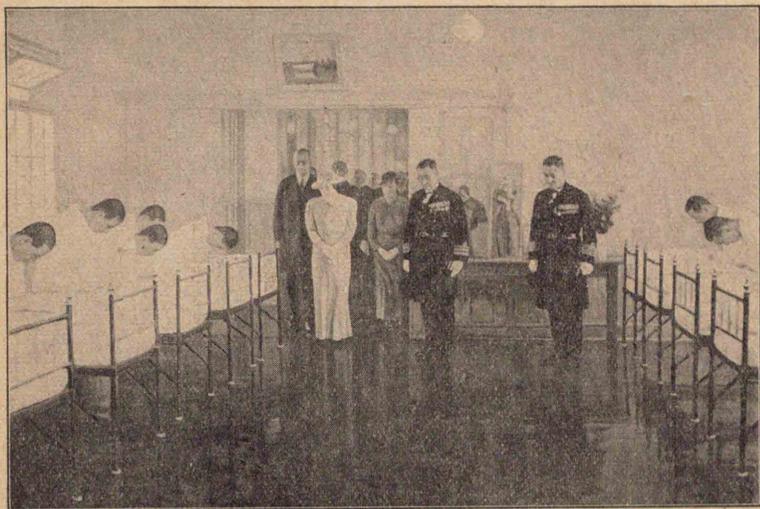
尋修三

尋修三

にお出でになつて、しごとがしだいにと、のつ
て来たことをおほめになり、みんな心を合はせ
て、此のしごとを一そう進めて行くやうにせよ。
といふ、ありがたいおぼしめしのおことばをた
まはりました。

昭和六年に満洲事變の起つた時、陛下は、満洲へ
行つて居る我が軍人の身の上をお思ひやりにな
つて、寒さをしのぐために、まわたをたまはり、
また、ごじしんではうたいをお作りになつて、き

ずを受けた人たちにたまはりました。



昭和十二年に支那事變が起つた時にも陛下は陸海軍の病院にお出でになつて、けがをした軍人や病氣になつた軍人をお見まひになりました。また戦死した軍人のみぞくの身の上をきのどくにおぼしめ

されて、ありがたい御歌をたまはりました。

二十七 よい日本人

よい日本人となるには、いつも天皇陛下、皇后陛下の御徳をあふぎ、皇大神宮をうやまひたつとんで、忠君愛國の心をさかんにしなければなりません。また、紀元節、天長節、明治節などの祝日のいはれをわきまへ、國旗を大切にすることも、日本人として、だいじなこゝろえです。

父母には孝行をつくし、先生をうやまひ、學校を
愛し、友だちは仲よくして助け合ひ、近所の人に
はしんせつにすることが大切です。

心をいつも正直にもつて、うちに居ても、外に出
ても、ぎやうぎをよくし、かんにんといふことを
忘れず、人と協同して助け合ひ、また、へいぜいは
けんやくをまもり、じぜんの心も深く、人のなん
ぎをすくひ、生き物をあはれむやさしい心がけ
がなくてはなりません。 さうして、人から受け

たおんを忘れないばかりでなく、きそくをよく
まもつて、人のめいわくになるやうなことをせ
ず、進んで、世の人々のためにこうえきをはかる
やうにしなければなりません。

いつも、自分のけんかうにちゆういして父母を
安心させ、けんかうなからだて、學問にはげみ、し
ごとにてせい出し、また、物をよくせいとんし、心を
おちつけて物事にあわてず、いざといふ時には、
何でも出来るやうな勇氣を、ふだんからやしな

つておくことも大切です。
 此のやうに、自分のおこなひをつゝしんで、よく
 人にまじはり、世のため人のためをはかつて、天
 皇陛下の御ためにつくすやうに心がけるのは、
 よい日本人となるのに大切なことです。さう
 して、これらのこゝろえをおこなひにあらはす
 には、すべて、まごころからしなければなりません。

終

尋修三

昭和十四年一月十日 修正印刷
 昭和十四年一月十二日 修正印刷
 昭和十四年一月十三日 翻刻印刷
 昭和十四年二月廿一日 翻刻發行

尋常小學修身書卷三 兒童用

定價金拾參錢

ぬ

著作権所有

著作兼
發行者

文 部 省

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
 東京書籍株式會社
 兼印刷者 代表者 石 川 正 作

昭和十四年一月十四日
 文部省檢査濟

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

發行所

東京書籍株式會社

9

広島大学図書

2500046877

